2023 年度　学位記・修了証書授与式　式辞

本日ここに、学士、修士、博士の学位記を授与された皆さん、並びに修了証書を授与された皆さん、皆さんの努力の結果として、今日の授与式を迎えられたことを東京理科大学を代表して心から祝福申し上げます。

また、皆さんの学ぶ姿を優しく見守り、時に励まし、日々様々な形で支えてこられたご家族の方々をはじめ、ご支援を賜りました多くの皆様方に、心より敬意を表すると同時に、厚くお礼申し上げます。是非とも、学位記あるいは修了証書を授与された学生をたたえ、ともにその喜びをかみしめていただければと思います。

学生の皆さんは、東京理科大学の学びの中で、様々な知識を得て、いろいろなことに取り組み、教員や仲間とともに多くの成果を得たことと思います。その過程で、大きな成果にこの上ない喜びを感じた時、失敗して挫折を感じた時、新たなチャレンジにときめきを感じた時、思いがけない出会いに心が躍った時など、かけがえのない多くの経験の中で、様々な思いを感じたと思います。皆さんにとって、その経験が、獲得した知識とともに、東京理科大学で得た宝物です。宝物に囲まれて学生生活は充実したものであったに違いありません。

ご存じの方も多いと思いますが、夏目漱石の小説「坊っちゃん」の中で、主人公の坊っちゃんは、東京理科大学の前身の東京物理学校の学生でした。小説の中では、坊っちゃんの卒業に対する思いとして、こう書かれています。

「三年間まあ人並に勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であった。しかし不思議なもので、三年立ったらとうとう卒業してしまった。自分でも可笑しいと思ったが苦情を云う訳もないから大人しく卒業しておいた。」

この文章を正しく理解するには、当時の東京物理学校の状況を知る必要があります。小説で描かれている当時の東京物理学校は、全員入学できたけれども、卒業は極めて難しく、ほとんどの学生が卒業できなかったと言われています。このことから、私は、この表現が、人並みに勉強しただけで難関を突破したという、すこし斜に構えて余裕を見せる形で、主人公の自信を描こうとした夏目漱石の独特の表現だと思っています。ほんのわずかの学生しか卒業できなかったのに、卒業できたという限られたエリートであることだけでは物足りず、「人並みに勉強しただけ」という余裕があったことを表現することで、さらにもう一歩上を行くエリート像を表現したものと思っています。当時、夏目漱石と東京物理学校の一部の教員は親交があったようなので、夏目漱石の東京物理学校への思いが背景にあったのかもしれません。

今日、授与式を迎えた皆さんにとっては、坊っちゃんの時代とはだいぶ形は変わったものの、「実力主義」という名のもとに、東京理科大学に当時の精神が引き継がれていることは、今この場にいる皆さんだからこそ、理解できるのではないかと思います。このことは、東京理科大学の卒業生のみが共有できるものであると思います。ただ、現代では、もっと直接的な形で、また多様性を内包した形で、東京理科大学の卒業生の資質を表現することができると思いますので、坊っちゃんで描かれたようなちょっと変わった表現とは違って、自分自身の言葉で、東京理科大学を卒業したことをかみしめていただければと思います。できれば、「東京理科大学で人並み以上に勉強しました」と堂々と言ってください。

もう一つ、当時の時代背景として、注目すべきことがあります。明治維新以降の社会変革は、政治、経済、法律などの指導者のもと、欧米の社会構造を再構成することを目標にして、新しい社会の構築を目指していました。そのため、欧米の知識を有し、政治や経済を論じる人材が重要視されていた時代でした。当時設立された教育機関もそういった人材の養成を目的としたものがほとんどで、本学の開学の時には、理学の教育機関は東京大学と東京物理学校しかありませんでした。つまり、当時は、理系人材の養成を目的とした教育機関としての東京物理学校が、極めてまれな存在であったことが窺われます。

そのような時代背景の中で、社会の基本構造を形作るのは、民主主義や資本主義といった社会が本質的に保有する内部構造に依拠する価値を基軸とするものであり、外部から得た知識で、時代を語り、社会を語り、変革を唱えることで、欧米をモデルとした社会を構築することができたわけです。知識が価値を持っていた時代で、知識が社会の中で偏在し、その希少性が敬意をもって受け入れられていた時代でした。

ところが、現代に眼を向けると、情報関連科学技術の進歩により、世界中で瞬時に、最先端の知識を受け取ることが可能となったことから、一般的には知識が偏在することもなく、知っているだけの知識の価値は低くなり、知識はその活用が問われる時代となりました。外部から得た知識だけでは、新規性のある大きな変革は成し遂げられず、また、社会の内部構造の分析だけでは、競争優位性のある世界は創れなくなってきました。今、必要なのは、与えられた知識と条件から、今までにない新たな価値を生む力です。未来の社会構造を築く力です。

近年、人工知能、ロボット、宇宙開発、バイオ・医療、新材料など、様々な科学技術の進歩が社会や生活を大きく変え、新たな価値を次々と生みだしています。政治、経済、法律などは、科学技術の発展に合わせて、従属的に変化することとなり、現代は、科学技術を基軸として、新たに創造される構造が社会の変革を牽引する時代、つまり、科学技術主義とでもいうべき時代となってきました。

その時代の先頭を走るのが、皆さんです。従来、専門人材と呼ばれる研究者、技術者は、専門的な技術を基盤とする組織が活躍の場で、専門知識を持っていることに期待が集まっていましたが、今や、科学技術に無関係と思われていた組織でも、科学技術を担う人材が必要となってきて、関連人材の養成に政府も力を入れています。つまり、現代は、知識をもっていることではなく、それを活用する知的生産能力が求められる中で、技術系の企業のみならず、応用展開を図るユーザー企業にも活躍の場が広がっています。このことは、皆さんが、単なる専門家ではなく、社会的使命を持ち、未来をデザインできる知的生産能力を持つ人材へと変わる必要があることを示唆しています。浅薄な知識や他者のキャッチアップにおもねる必要は全くありません。皆さん自身が社会を先導することが求められています。

すなわち、今、時代を語り、社会を語り、変革をデザインするのは、皆さんです。このことは、同時に、社会的責任や倫理性も強く求められます。科学技術の「なぜ」に応えるとともに、何を、どうやって、何のために作るかが問われます。なぜなら、生みだす科学技術に価値があるわけではなく、その科学技術が創る世界に価値があるからです。その世界は、すべてが社会的に受け入れられるものでなくてはならないので、専門の視点だけではなく、様々な視点を持つ必要があり、ジェネラリストの素養も求められることになります。

東京理科大学で皆さんが得た知識だけでは、先頭に立てません。大学に許されている思考の自由の中で、真理の探究と価値の創造のために磨き上げた知能が重要です。大学は必要な知識のすべてを教えることはできません。一方で、学んだ知識をすべて使うことはないけれども、磨き上げた知能や思考の論理は必ず使います。それが東京理科大学での皆さんの学びの中で得た重要なスキルです。正しいと考えた自分の論理を信じぬき、自分が生み出した科学技術に情熱を持って、先頭の景色を見続けてください。そこには、先頭を走るものだけの世界が広がっているはずです。

必要な知識は時代とともに変わっていくので、卒業後も学びは続きます。これからの長い人生の中で、変化し続ける科学技術や社会環境に対応していくためには、常に新たな学びが必要です。東京理科大学は、その学びを様々な形で応援します。

人間の感覚には、順応という微分特性があります。変化には感度が高いけれど、同じことが続くと感度が落ちる特性です。最先端技術などの新たな成果は、最初は驚きを持って受け止められますが、ほどなくして順応が起こり、当たり前の世界がやってきます。ところが、実績やスキルは、長い間の積み重ね、つまり積分されるものです。皆さんの今後の人生は、この微分と積分の両方の特性があり、生涯にわたる学びでは、その両方に力を注ぐ必要があります。

今日、皆さんは東京理科大学から大空に飛び立ちます。自分で決めた道を自分の力で力強く歩んで行っていただきたいと思います。今、社会はそんな皆さんに期待しています。幅広い科学技術の基盤を持つ皆さんは、到来する科学技術主義の時代の中で、人間社会の豊かな未来を自らの手で創造する力を持っています。ぜひ、社会の新たな価値を創り出してください。東京理科大学は、それを後押しします。

皆さんが東京理科大学で学んだことのすべてが、皆さんが社会に飛び立つ大きな力になります。その力を駆使して、皆さんが社会の中で光り輝き、充実した人生を歩むことを祈念して、私の式辞と致します。

2024 年 3 月 18 日

学校法人　東京理科大学

学長　石川正俊